

瓶原みかのほら〔木津きづの巽むかひ三十町許まじりにあり。いにしへは三日原みかのほら、三香原みかのほら、甕原みかのほら、三鹿原等みかのほらとうに書す。中に多郷たがうあり、前編に見へたり〕

拾玉集 影清き月は波間にいづみ川秋の十日のけふみかのほら

慈 鎮

御霊社ごりやうのやしら〔瓶原河原村みかのほらかはらむらにあり、いにしへ国分寺こくぶんじの鎮守なり。土人生土神どじんうちしんとす〕

瓶原離宮みかのほらりきう〔旧地詳ならず。続日本紀曰、天平十一年三月甲午、天皇甕原てんわうみかのほらの離宮に行幸し給ふ。又曰、乙卯天皇及び

太上天皇甕原みかのほらの離宮に行幸します。又云、和銅六年乙卯甕原みかのほらにみゆきあり。同七年閏二月己卯甕原離宮みかのほらりきうに行幸し給ふ。云々〕

清見川原きよみがはら〔瓶原岡崎村みかのほらをかざきより鴨のわたしにいたる川原をいふ〕

加茂渡口かものわたし〔瓶原みかのほらより加茂かもに至るわたしなり。坤の方は南都般若坂なんどはんにやざかに出る、行程は一里ばかりなり。川上良の方は、

笠置かさぎ、飛鳥路あすかぢ、有市等ういちとうに行。笠置は是より四十町にあり、其末は伊賀堺いがさかひに到る、南は奈良路ならぢにして、南都の町天蓋てんがいの北

に出る。其中間に民村あり、これを梅谷うめたにといふ」

法華寺野ほっけじの〔鴨の渡かもわたしの西八町ばかりにあり、村の名とす、民家あり〕

浄瑠璃寺じやうるりじ〔法華寺村のほとりにあり。本尊は阿弥陀あみだぶつの大像九体を安置す。天元年中多田満仲ただまんちゆう当寺を草創し、行ぎやう

基きの作り給ふ薬師やくし仏ぶつを安ず。其後義明上人再建し給ふ〕

伽藍開記曰がらんかいき 浄瑠璃寺じやうるりじは、山州相楽郡木津川さがらのこほりきづがはの上西の方小田原をだはらにあり。本朝六十四代円融院帝えんゆうゐんていてんげん天元年間てんげんに、多田満ただまん

仲源ちゆうみなもとこうたうさん 公当山こうたうさんに就て精藍を創し、ぼさつ僧行基ぎやうきししゆざう手造てぞうの薬師やくし仏ぶつを安置す、号して浄瑠璃寺といふ、莊田若干頃を納

て寺産とす。其後六十余年を歴て、義明上人ぎみやうといふあり、錫を此山に移し、仏工定朝ぶつくちやうてう造る所の阿弥陀あみだの九軀を以て

当寺に安置す。第七十八主二条天皇宸書ひみつしやうごんゐんの額あり、秘密莊嚴院かまくらしやうぐんざねともといふ。鎌倉將軍実朝公米田よねた一千石銅錢一千貫を納

て僧糧を資く。山中に子院しゐん若干所そほくしよあり、実に一の大精藍なり。惜らくは年代久遠きうゑんにしてみな廢し、唯九軀みだの弥陀みだの

像存ず、故に庶民寺号を知らずして九体仏といふなり。云々。

加茂かかも〔郷名とす、加茂のわたしの南なり。中に多郷あり、北村きたむら、舟屋ふなや、苧並をなみ、里村さとむら、大野おほの、観音寺くわんおんじ、高田等たかたとうなり〕

岡田山をかだやま〔加茂のひがしの山をいふか、いにしへ此山より、銅出たり〕

三代実録曰 貞觀八年六月十日丙寅、前筑前守從五位下清原真人真貞を以て、山城国岡田山の銅を採しむる使とす、

判官一人主典一人。

加茂社かものやしろ〔加茂里村さとにあり。平安城加茂太神宮へいあんじやうかもだいじんぐうはじめて勸請の地なりとぞ〕

風土記曰 可茂かもの社を可茂と称するは、日向ひふがの曾その之高千穂たかちほの峯に天降りまします神にして、加茂建角身たけすみの之命のみことなり。神

倭盤余比古やまといはわれひこの御前に立ましくて、大和葛木山かつらぎの峰に宿りましく、かしこより漸山城国岡田やましろのくにの加茂かもに遷り、山城

川に随ふて下り、葛城川かどと加茂川と会立所に坐すと。云々。

延喜式曰 相楽郡岡田鴨神社さがらかものかものと。云々。

東明寺とうみやうじ〔加茂村にあり。法華宗、洛の本国寺末、いにしへは天台宗なり、後世今宗となる〕

岩船寺がんせんじ

なり」

〔浄瑠璃寺じやうるりの末院にして、法華寺村の山奥甘町許あまのまちにあり。本尊阿弥陀仏あみだぶつ、坐像八尺、聖武帝天平年中しやうむの建立

願興寺ぐわんこうじ

〔瓶原西村みかのほら十町許北にあり。禅宗、古へは天台宗にして、薬師堂山上にあり、荒廢して後世東福門院とうふくもんゐん御再建

し給ふ」